

最期まで住み慣れた地域で暮らし続けるために

平成 29 年 11 月 26 日(日)川崎市医師会館にて、280 名の参加者がつどい「川崎市在宅医療市民シンポジウム」が開催された。開催挨拶は川崎市医師会会長高橋章氏、川崎市健康福祉局医務監坂元昇氏で、基調講演は上野千鶴子氏でした。シンポジウムは医療的ケアのある事例を通して、模擬サービス担当者会議の形式で在宅医師・訪問歯科医師・訪問看護師・ケアマネジャー・地域包括支援センターの立場から、課題に対して意見交換を行った。全体ディスカッションでは、上野千鶴子氏も加わり、活発な意見交換が行われた。閉会挨拶は運営を担当した川崎市看護協会の広瀬壽美子会長が行った。

《基調講演》 テーマ：最期まで住み慣れた地域で暮らし続けるために

～おひとりさまでも大丈夫～



＜上野千鶴子氏＞ 社会学者

- ・東京大学名誉教授
- ・認定NPO法人
ウィメンズアクションネットワーク
(WAN)理事長

ご自身が執筆した 2007 年『おひとりさまの老後』、2009 年『男おひとりさま道』、2013 年『上野千鶴子が聞く、小笠原先生、ひとりで家で死ねますか？』、2014 年『ケアのカリスマたち』、2015 年『おひとりさまの最期』までの 8 年間の経過を語られた。そして、ひとり暮らしの高齢者調査の結果から、ひとり暮らしの満足度が高い事を伝えられ、辻川覚志氏の『続老後はひとり暮らしが幸せ』から「おひとりさまビギナーは、さみしいが不安でない」「もともとのおひとりさまは、さみしくも不安でもない」「いちばん寂しいのは、気持ちの通じない家族と同居している高齢者」であることを紹介された。

社会学者として様々なデータを示し、「2025 年問題」、「増える死亡数」、「日本人の死に場所」、「ほぼ在宅、ときどき病院」

「看取り難民の急増」等について解説された。超高齢社会は誰もが「中途障がい者」になる時代で、「障がいを持っても安心して暮らせるのか」と参加者に問いかけながら、先駆者の方々の実践を語り、自ら在宅医師の訪問診療に同行して実際の現場を見て来られた内容が話された。

市民が知りたい目線から、「家で死ぬための費用は」、「がんほど在宅看取りにふさわしい死には方はない」と歯切れ良い口調で明快に話された。そして「在宅ひとり死の条件」として 3 つ「自己決定」、「司令塔」、「システム」を上げられた。三国浩晃氏の『おひとりさまで逝こう 最期まで自分らしく』について自身の推薦文「おひとりさまも自己決定できるうち… もしそれができなくなったら？正直言うと私は不安を感じていました。その不安を解消してくれるのがこの本です」と紹介された。

最後に「秘境探検に乗り出した」と前置きをされ、ターミナルケアはハードルが越せる。独居でも越せる。残された認知症独居の方の在宅が可能かを研究中と事例・写真を紹介。認知症の方、本人の声を聞いてケアする事の大切さを語られ当事者の言葉を伝えられた。

一緒に「あんしんの仕組みを作っていく事が大事」と講演を締めくくられた。



《シンポジウム》 ～医療的ケアのある事例を通して～

川崎市医師会理事渡邊嘉行氏がコーディネーターを務めた。「医療依存度の高い方を支える為にはどうあったら良いか」をテーマに、人工呼吸器・胃ろう・吸引等の医療的ケアがあり、様々な課題と葛藤の中、本人が希望した「自宅看取り」ができたが支援の過程で課題が残った事例を論点とともに振り返った。



シンポジスト

在宅医師の立場から新井理之氏
訪問歯科医師の立場から高森勝久氏
訪問看護師の立場から阿部弘子氏
ケアマネジャーの立場から大谷ゆう子氏
地域包括支援センターの立場から北川大氏

サービス担当者会議(模擬)の「論点」

- ①医療的ケアのある方が在宅療養される場合、開始前もしくは開始時にどのような準備をしておくが良いか
- ②具体的に、Aさんにどのような情報を伝えておく良かったか
- ③本人の思いをどう汲み取るか？汲みとった思いを支援者がどうすることで、本人の希望をかなえた在宅療養が出来るか

シンポジストからは、「介護保険サービス以外に使えるサービスは無いかを確認しておくことが重要」、「病状の進行・障害の程度で受けられるサービスの内容を、本人・家族・支援に関わるチームで知っておく必要がある」、「人の気持ちは揺れ動く。予防の段階から『医療』『介護』の多職種がチームを結成し、病気と生活の両方を支えるこ

とが重要」、「当事者本人の気持ちをしっかり受け止めることからケアは始まる」、「口腔ケアが大切」、「在宅を希望した方に、今ある医療資源を考え、チームで関わることで、ギリギリまで可能であったり、実際に最期まで在宅療養が可能になります」との力強い発言があった。

《全体ディスカッション》

市民からは、川崎の医療・介護についての意見、看護小規模多機能居宅介護事業所の数について質問があった。上野先生からは多職種連携の課題について、それぞれの職種に意見を求められ、シンポジストが回答する中で各専門職の役割や熱意がより明確に参加者に伝わるディスカッションとなった。



《アンケート結果》

アンケートに答えた170名の内、82名が市民だった。20代から90代と幅広い年代の方が参加。「今日の話は“最期まで住み慣れた地域で暮らし続けるために”を考えるきっかけになりましたか」の設問には96%の方が「はい」と回答。最期を迎えるのに希望する場所について「自宅」が57%、「わからない」が22%、「ホスピス」が5%、「病院」が4%だった。「様々な情報を知り、安心して在宅で終われる足がかりになった。一人暮らしになっても安心」「若い人たちにも知ってほしい」「話を聞いてほっとした。死ぬことが怖くなくなった。自宅で死のうと思った。がんも認知症もしょうがない」「不安で講演会前に質問を書いていたが、講演の中で話をしてくれてとてもよかった。独居の為、『延命断る』と書き印鑑を押して貼っている」等の声が寄せられた。

《編集後記》

4回目となる今回のシンポジウムでは、アンケートからも、市民の皆様と共に支え合う「地域包括ケアシステム」を推進していると実感しました。事前に意見や質問を下された多くの方が、講演の内容を通して安心に繋がり、質問の回答を得られたのではないのでしょうか。シンポジウムの内容を皆様の地域での活動に活かして頂きたいと願っております。

《運営・問い合わせ》

公益社団法人川崎市看護協会
〒211-0067
川崎市中原区今井上町 1-34 3F
TEL : 044-711-3995
FAX : 044-711-5103
メール: mail1@kawa-kango.jp